

あぐりチャレンジ事業を採択

生産組織の新たなチャレンジ始まる



当JAが意欲ある生産組織の取り組みを支援する「令和5年度あぐりチャレンジ事業」が採択され、各地区で新たな取り組みが始まっています。今回の特集は、各地の取り組みの中から、2024年計画に定める主要品目や地域戦略品目の取り組みの一部をご紹介します。

意欲ある生産者を支援 「あぐりチャレンジ事業」

JAふじ伊豆誕生の目玉企画として、創立初年度から行っている「あぐりチャレンジ事業」は、農業所得の向上や農業生産の拡大、生産組織の基盤強化に向けて本年度も引き続き展開しています。

同事業は、当JA組合員による生産組織やグループ、正組合員である法人を対象に、事業費の90%以内で200万円を上限に助成する、当JA独自の制度です。

昨年度は、募集申請を5月31日までとしましたが、本年度は広く組合員の皆さまに周知し、利用を検討してもらうため募集申請を8月31日までと昨年度より期間を延ばして募集しました。

新たなチャレンジ 22件の事業を採択

本年度は、各地区から25件の応募があり、営農経済担当職員が9月、10月の2回にわたり審査会を開き、慎重に審査しました。

審査会では、①新たな作物、転換作物の導入②新たな生産技術、改良技術の導入③新たな需要の創造を図る販売④生産部会による試験的な取り組みなど、支援対象事業としてふさわしいか、JA職員と共に計画を立てて事業に取り組み、おおむね3年以内に一定の成果が見込める事業計画であるかなどを総合的に審査。その結果、22件、合計助成金額1805万円が採択されました。採択された事業は、9ページの表のとおりです。



畑ワサビの苗



沼津ねがた白ねぎを収穫する帯金秀充部会長



果実の確認作業をする神田豊通さん



富士山麓落花生をPRするラベル

伊豆の国地区



スリップス(アザミウマ類)の被害を抑え増収につなげる

伊豆の国苺委員会では、スリップスに対する天敵資材「アカメ®」を「あぐりチャレンジ事業」により試験的に導入し、効果を検証した上で生産者への普及を図り、収穫量の向上を目指します。計画では反収・株あたりの収量を前年比3〜5%増加させていきます。

同地区のイチゴ栽培では、スリップスのイチゴ食害による出荷ロスが課題になっていました。スリップスに対する農薬が少ないことや、授粉用のハチに影響する薬剤もあるため、散布のタイミングが難しいことに加えて効果がみられないこともありました。

天敵資材の効果みられる 防除体系の確立を目指す

同地区で「紅ほっぺ」や「きんぎょ香」を43アール栽培している神田豊通さん(42)は「アカメ」を導入した結果、例年スリップスに対する農薬散布は3〜4回あるものが、1回で済むようになりました。「ロス果も減り、ハチにも影響がなくなり、天敵資材は休みなく仕事をしてくれ、増殖してくれる」と効果を実

天敵資材普及で イチゴ収穫量の向上へ

感じています。

同地区イチゴ担当の田中達也職員は「イチゴの害虫・ハダニについては、防除体系が確立している。『アカメ』利用も防除体系を確立し、当産地の増収につなげたい」と期待を込めました。



伊豆の国苺委員会所属の神田さん



イチゴ栽培について田中職員と話す神田さん(左)

あいら伊豆地区



生産者の負担増・高齢化が課題

あいら伊豆蔬菜(そさい)部会では、新たな作物「畑ワサビ」の導入で組織の活性化を目指しています。

同部会は、主要品目がなく共販体制が取れず、少量多品目栽培のため、個々の生産者の栽培から出荷までの負担が大きく、収益性が少ないことが課題となっていました。部員の平均年齢は69歳で、高齢化と後継者不足も深刻です。

管内他地区の先進事例を導入

これらの課題を改善するため、同部会では、伊豆の国地区で栽培技術や販路が確立し、収益性の高い「畑ワサビ」の導入を検討。「あぐりチャレンジ事業」を活用して、畑ワサビの試験栽培に取り組んでいます。

同部会を担当するあいら伊豆地区営農販売課の山口杏奈職員は「当JA主要品目の『ワサビ』は、2024年計画で『畑ワサビ』の生産拡大を掲げている。あいら伊豆地区でも、生産拡大に向け取り組みたい。当初9人での栽培を検討していたが、伊豆の国地区への視察後、3人増えて12人が栽培に加わってくれた」と意気込みを語りました。

生産部会の強化に向けて 「畑ワサビ」の試験栽培開始

同部会の吉田正部会長(68)は「生産技術も販売体制も確立しているところに魅力を感じる。当地区では生産したことのない作物だが、合併のメリットを生かして成功に導きたい」と期待を込めました。



吉田部会長



畑ワサビのほ場で話す吉田部会長(左)と山口職員

令和5年度 あぐりチャレンジ事業 採択一覧表

地区	品目	企画内容	採択金額(円)
伊豆太陽	主要 イチゴ	【伊豆太陽地区いちご委員会】 イチゴ育苗にかかる労働力軽減と計画出荷のための育苗資材導入	334,800
	キウイフルーツ	【伊豆太陽地区キウイ部会】 潤沢な花粉確保による収量増加と、輸入花粉から自家採取への切り替えによるコスト削減に向けた栽培技術の確立	662,100
三島函南	地域 セルリー	【三島セルリー組合】 品目別振興計画の早期達成に向けた労働力軽減と生産面積の拡大を推し進める自走式コンボキャスタの導入	735,300
	地域 トマト	【三島トマト部会】 秀品率向上に伴う販売高の増加を目指した簡易溶液分析機器を用いた営農指導による適切施肥の実施	328,600
伊豆の国	主要 イチゴ	【江間いちご狩り組合】 破棄イチゴの有効活用に向けた急速冷凍機の導入	2,000,000
	主要 イチゴ	【伊豆の国苺委員会】 栽培技術確立によるアザミウマ被害率軽減に向けた天敵資材アカメの導入	839,800
	主要 ワサビ	【伊豆の国わさび委員会】 ワサビ沢の条件と苗の種類における相関性の生育調査	71,600
	主要 ワサビ	【天城湯ヶ島山葵組合】 苗の長期保存によるコスト抑制と定植本数の増加による販売高増加のための加湿器付き冷蔵庫の導入	1,348,200
	地域 トマト	【おいしいトマト研究会】 出荷計画による販売強化に向けたミニトマト出荷予測ソフトの開発	333,000
あいら伊豆	主要 畑ワサビ	【あいら伊豆 ^{そさい} 野菜部会】 生産部会組織の強化に向けた新規作物「畑ワサビ」の導入試験栽培	364,500
	主要 レモン	【あいら伊豆レモン研究会】 レモン栽培発祥の地から全地区統一ブランドを創造すると共に生産拡大による品目別振興計画の達成に向けた試験栽培	1,955,500
	トマト	【あいら伊豆野菜部会クッキングトマト部】 アイランドルビーの新プライベートブランド商品の開発による生産から販売までの一貫した体制整備とブランド力強化	322,800
なんすん	主要 ミカン	【西浦柑橘出荷部会】 「西浦みかん寿太郎」の出荷資材の差別化による販売高向上	1,371,600
	主要 イチゴ	【裾野いちご組合】 高濃度炭酸ガス処理システムの導入による、イチゴ苗ハダニIPM防除体系の確立と防除作業の省力化	1,718,500
	地域 白ネギ	【沼津ねがた白ねぎ部会】 播種から発芽にかかる作業性を向上し、部会の生産拡大を図る	783,000
	キンカン	【なんすんキンカン部会】 改植・せん定作業の効率化による収量増に向けたマルチパワーカッターの導入	630,000
御殿場	キウイフルーツ	【御殿場キウイフルーツ出荷組合】 キウイフルーツの主品種の転換による栽培面積維持拡大	254,300
	地域 水稲 ブロックリー 水かけ菜	【上小林三徳会】 畝の成形機と溝切機を導入し、農家所得向上を目指す	944,300
富士	地域 タマネギ	【富士地区農業アカデミー部会】 水稲の複合経営確立に向けたタマネギの定植作業のスマート農業導入	1,242,000
	キャベツ	【富士伊豆農協伝法支店農業経営研究会】 キャベツ栽培の作業効率向上と販路拡大に向けた定植機導入	934,900
富士宮	地域 落花生	【富士宮落花生部会】 落花生出荷ラベルを活用した発信力の強化	227,700
	ギンナン	【富士宮 ^{ぎんなん} 銀杏部会】 せん定作業の効率化に向けた高所作業車導入	647,500

合計:18,050,000

主要 主要品目…管内広域で生産されている将来に向けて振興を図る特産品 地域 地域戦略品目…地域特性を発揮して振興を図る品目

なんすん地区

作業性向上と労働力負担軽減で生産拡大へ

沼津ねがた白ねぎ部会は、播種から発芽にかかる作業性向上のため、「あぐりチャレンジ事業」を活用して自動土詰め機と発芽機を新たに導入します。

同部会は部会所有の自動土詰め機を使用し、共同で播種を行っています。手動では育苗箱に土をかぶせる圧力が均一にならない場合があり、発芽率の低下が心配されます。自動の場合は一定の圧力がかかり、手作業での負担もなくなるため、作業の効率化と労働力軽減が期待できます。

これまで播種から発芽までの期間はハウスで温度を一定に保つよう管理してきましたが、朝と夜の気温差が問題でした。発芽機を用いることで、発芽のための温度管理が適正に行われ、最短での発芽成長を目指せます。

しずおか農林水産物認証

沼津ねがた白ねぎは、静岡県のGAP認証「しずおか農林水産物認証」も受けるブランド農産物です。帯金秀充部会長(46)は「播種や発芽は収量に関わる重要な作業。機械の導入で部会員の作

播種、発芽の作業性を向上し沼津ねがた白ねぎの生産拡大へ

業均一化と省力化につなげたい」と話します。

同部会を担当する石渡加純職員は「県のGAP認証でブランド力を生かし、白ねぎの生産拡大につなげたい」と意気込みます。



帯金部会長



生産について意見交換する帯金部会長(左)と石渡職員

富士宮地区

消費者の目にとまる「ブランド認知度」向上へ

富士宮落花生部会は、販売力強化と「富士山麓落花生」のブランド定着のため、「あぐりチャレンジ事業」を活用して落花生出荷用ラベルを作成し、本年度の出荷から利用を始めました。

ラベルには、「しずおか食セレクトション」認定マークや「富士山麓落花生」の商品名とロゴマークの他、裏面にはゆで落花生の文化やおいしさを広めようと、落花生のゆで方も記しています。

販売高と栽培面積の増を目指す

同部会では、販売力強化による販売高と栽培面積の増を計画。令和4年度の販売高は1569万円、栽培面積は8.7ヘクタール、出荷量は15トンでしたが、計画では令和8年度までに、1720万円、13ヘクタール、17トンを目指します。

同部会の荻真教部会長(45)は「ファミリー出荷でも売れ行きの良い感じだ。部会員一体で周知に取り組み、消費者に選ばれる商品づくりを目指したい」と意気込みを話しました。

同地区落花生担当の佐野零也職員は

富士山麓落花生の販売力強化とブランド定着を図る

「消費者の認知度向上に向けた富士山麓落花生の発信力強化が課題。本ラベルを広報資材の一つとして活用し、販路拡大につなげたい」と期待を込めました。



荻部会長



ラベルを披露する荻部会長(左)と佐野職員